The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	史記留候世家の一節について
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 1993, 9, p. 225-234
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論集第9号（1993年）

史記留侯世家の一節について

勝藤　猛

《史記・留侯世家》獻疑

摘要　據《史記卷九十七・酈生（酈食其）列傳》，漢三年（公元前二〇四年）西楚霸王項羽逼至滎陽，圍攻漢王劉邦，漢王遁走，固守鞏，洛。當此劉邦生死關頭，酈生獻計説："願足下急復進兵，收取滎陽，據敖倉之粟，塞成皐之險……"。據《高祖本紀》，高祖三年漢王出滎陽入關，收兵欲復東進。此時袁生勸劉邦説："願君王出武關，項羽必引兵南走……，令滎陽，成皐之間且得休。……則楚所備者多，力分，漢得休，……破楚必矣。"酈，袁所説，雖有些不同，但以滎陽一帶爲據點，養精蓄鋭，伺機反攻的戰略方針則相同。由此觀之，《史記》此段記載可以認爲是歷史事實。若此論斷成立，《留侯（張良）世家》中有關此段的記載便大可懷疑。據《留侯世家》，項羽前來奪取滎陽時，酈食其爲劉邦出謀曰，倘若劉邦分封六國後嗣，則六國君民必皆感恩戴德，合力擁戴劉邦。劉邦聽了此話便毫不猶豫地聽從了。酈生獻此計與《酈生列傳》完全相反。當時諸侯威信業已掃地，六國後裔亦已淪落，因此分封諸侯，牽制楚軍之難以奏效，洞若觀火，劉邦雖禍在旦夕，不得冷靜思考，也理應駁斥酈生謬論。宋王若虛《滹南遺老集・史記辨惑》云："張良八難，古今以爲美談，竊疑此論甚疏"，並對張良論難劉邦八條，逐一提出疑問。筆者認爲，《留侯世家》中酈食其獻計一段記載並非史實，而是司馬遷爲了嘲笑劉邦昏庸無能而創作的虛構。如此解釋，王若虛之疑問方可氷釋。

I

項羽と劉邦の対立の際に劉邦に従った酈食其という人物がある。まず彼の一生を，主として史記酈生伝により，素描する。

酈生［生は敬称］，名は食其。陳留県高陽の人。学問を好んだが，家が貧しく，里の監門吏［町の門番］となった。人々は彼を狂生［気違い先生］と呼んでいた。

沛公＝劉邦が高陽を通った。食其は彼が人をばかにする癖があるが，大略の持ち主であると聞い

ていたので，会おうとした。食其が行くと，劉邦はふたりの女子に足を洗わせており，そのままの姿で彼を引見しようとした。食其は言った「あなたは秦を助けて諸侯を攻めるつもりか，それとも諸侯を連れて秦を討つのか。」劉邦はどなった「豎儒［ばか儒者］め。」食其「正義の兵を集めて無道の秦を誅せんとする者が，そんな態度で年長者に会ってよいものか。」食其は時に年齢60歳余であった。そこで劉邦は急ぎ立ち上がって衣服をととのえ，食其を上座につけ，非礼をあやまった[1]。

それから両人は食事を共にしながら，時世に対する方策を論じた。食其は，自分の郷里，陳留を取れと進言した。ここは天下の交通の要衝であり，また多量の穀物が蓄積されている。自分はここの県令と親しいから，話をつけようと。こうして陳留は劉邦のものに帰した。

漢の元年［前206年］楚の項羽が天下第一の実力者として論功行賞をした時，魏の地を自分のものにしようと，魏王＝豹を国がえし，西魏王とした。しかし魏豹は漢王＝劉邦につき，楚をその都，彭城に攻めた。ところが漢が敗れたので，漢王に背いた。漢王は豹に漢側に戻るよう説得することを食其に命じた。食其は出かけて行ったが，魏豹は，漢王の無礼な振舞いが気にいらない，顔を見るのもいやだと，臣従を断った。そこで漢王は実力を行使し，韓信を派遣して豹を捕らえ，連れて来て漢王の部下とした。（魏豹に対する工作は，魏豹伝，淮陰侯伝。高祖紀は豹が漢に背いた時を漢の３年とする）

漢王は周苛・樅公・魏豹３将をして滎陽を守らせた。そのうち前二者は，豹がかつて楚に仕えたことがあるから，信頼できないと，共謀して豹を殺害した。あとのふたりは楚が滎陽に攻めて来て，殺した。

漢の３年，楚は滎陽を占領した。漢軍は逃走し，鞏と洛陽の線でもちこたえた。漢王は滎陽や成皐で度かさなる敗戦の結果，成皐以東を放棄し，鞏と洛陽の間で戦力を保って楚軍を阻止しようと計った。酈生は漢王に言った「“天の天たるを知る者は王事成るべし，知らざる者は成るべからず”と管子にあります。王者にとって民が天［不可欠のもの］であり，民にとっては食が天であります。かの敖倉には，長い間に大量の穀物が貯蔵されています。楚軍は滎陽を取ったものの，敖倉を棄てて，兵を東方へ向けています[2]。この楚の失敗は漢の好機です。これを逸してはなりません。また“両雄は並び立たず”といいます。楚と漢は長く対峙して優劣は定まらず，天下万民の心は落ち着く所を知りません。どうか早急にもう一度兵を進めて滎陽を回復して敖倉の穀物を支えとし[3]，成皐の険阻の地に要塞を築き，大行山の道路を閉鎖し，蜚狐関の口で防衛し，白馬の渡し場を抑えて，漢は実力で楚を制圧することを諸侯たちに示すなら，天下の人はどちらに着くべきかをさとるでしょう。」

そのあと，酈食其は外交政策を提案する。

「現在，燕と趙は平定されましたが[4]，齊はまだ降伏していません。わたしが君の命をもって行き，齊王に説いて，漢に従わせ，その東方の防衛者とならせましょう。」

漢王は「善し」と賛成した。酈生は齊王＝田広と問答する。

「天下は漢・楚どちらのものになると思いますか。」[5]「わからぬ。」

「わかれば齊は存続しますが，わからなければ無事ではいられませんよ。」

「どちらのものになるとお前は思うか。」「漢です。」

漢が楚に対して有利な理由を，食其は以下のように解説する。

楚の項羽には道義的失点がある。先に秦都咸陽を占領した者がその地の主となるという約束に背き，先に入った劉邦にこの地を与えなかったこと，また一旦奉じた楚王＝義帝を遷し，殺したことである。また劉邦には諸侯の兵が四方から集まり，食糧も船に満載して各地から彼のもとに来ている，と。

これを聞いて齊王は納得し，漢と同盟することにした。

ところが一方，韓信は，酈生が弁舌で齊をくだしたことを知るや，大軍を率いて齊に攻め寄せて来た。同じ漢に属する韓信が迫るとは，自分はだまされたと思った齊王は，酈生を責めた「韓信の軍を止めよ，止められないなら，お前を殺す。」

一本気な韓信の猛進を口先だけで止められないと，酈生は覚悟を決めた。いずれにせよ齊は漢のものになる，自分の長い人生これで本望，と。「“大事を挙ぐるには細謹せず，盛徳は辞譲せず”。汝のために頼むことはしない」と言うや，齊王は彼を煮殺した。

“狂生”“豎儒”と罵られた男のいさぎよい最期である。

以上のうち特に漢の3年，苦境にある劉邦に与えた策を，高祖紀，留侯世家に見える同年の記事と比較するのが，小論の目的である。

Ⅱ

楚漢の争いから，漢の2，3年の主要事件を，項羽・高祖両本紀などにより，略述する。時間的前後関係は必ずしも厳密ではない。特記しないものは，両本紀による。

1　漢の2年，春，漢王＝劉邦は5諸侯［戦国七雄の中，秦・楚を除くものか］の兵56万を率い，東方，楚を伐つ。項羽は精兵3万をもって対す。漢軍は攻めて楚の都＝彭城を取る。

2　4月，項羽は逆襲して彭城に戻り，漢の兵10万余を殺す。逃げる漢軍を追撃し，さらに10万余を倒し，睢水が死体で埋まる。

3　諸侯は，楚が強く漢が敗れたのを見て，みな漢を捨てて，楚に味方す。（高祖紀）

4　漢王は勢力回復のため，項羽の下にあった黥布を説得して，楚に背かせることに成功。（黥布伝）

5　大風が吹き，昼なお暗く，漢王はこれに乗じて数十騎とともに逃げる。（項羽紀）

6　漢王，娘と息子に会い，車に載せて走るが，邪魔だと，再三子供を車から突き落とす。（滕公［夏侯嬰］伝）

7　漢王，故郷＝沛に寄ったが，家族と会えず。（高祖紀）

漢王，父と妻を探したが，会えず，彼らは楚のとりこになる。（項羽紀）

8　楚は漢と滎陽の南，京・索あたりで戦う。漢が楚に勝つ。

9　この時，漢王は関中で留守を守る蕭何をねぎらう［実は疑う］。（蕭相国世家）

10　漢王が彭城で楚に敗れたので，諸侯はまた楚に味方して漢に背く。（項羽紀。3と同じか）

11　漢の3年，項羽は漢の甬道［滎陽・敖倉間の？］を侵す。漢王，食乏しく，和を請い，滎陽以西を漢領，以東を楚領としようとしたが，項羽これを許さず。

12　漢王は陳平の計を用い，楚側に離反を起こす。范増は“願わくは骸骨を賜いて卒伍に帰らん”と言って項羽の下を去り，まもなく病死。

13　漢王，紀信の計を用い，女子の群れにまぎれて滎陽から脱出。

14　滎陽守備の3将の仲間割れ。（魏豹伝）

15　袁生，漢王に説く。――後述

16　項羽が成皐を囲む。漢王は逃げ，張耳・韓信の部下を自分のものとする。（項羽紀は漢の4年，淮陰侯伝は3年6月とす）

17　項羽，さきに捕らえた漢王の父を漢王の目の前で煮殺そうとするが，項伯がやめさせる。（項羽紀）

ここで問題にするのは，漢側が不利を切り抜ける方策である。15―袁生［これも酈生と同じく知識人か］の提案と，Ⅰで述べた酈生のそれは，ともに漢の3年のことである。まったく同じ場合かどうかはわからない。項羽が滎陽を包囲し，劉邦は紀信の計により逃げ出した。周苛と樅公が守ったがふたりとも戦死した。劉邦はそれから「関に入りて兵を収めた。」これは劉邦出陣中，関中にいて，兵員・食糧の補給を担当していた蕭何に頼ったことか（蕭相国世家）。このような漢にとって困難な条件の下で袁生が立てた作戦は，劉邦が反撃のため東に向かうのに，普通の真東のコース，つまり函谷関を通るのでなく，東南方，武関から出て，宛・葉付近で戦え，そうすれば楚は兵を分散して，南へも出すだろう。すると滎陽・成皐への楚の圧力が減り，漢軍は少しは休める。その後で戦えば，漢が楚を破ること必定，ということらしい。（項羽紀，高祖紀）

酈生の策が滎陽付近を集中的に守ろうとするのとやや相違するが，ともに漢が当面の危機を脱するための戦術として，納得できる。

Ⅲ

留侯世家から問題の一節を引く：[6)]

漢の3年，項羽は激しく漢王を滎陽に包囲した。漢王は恐れ心配し，酈食其と楚の権力を弱めることを謀った。食其は言った：

昔，殷の湯王は夏の桀王を討伐し，その子孫を杞に封じました。周の武王は殷の紂王を討伐し，その子孫を宋に封じました。今，秦は徳を失い義を捨て，諸侯の社稷を侵略討伐し，戦国の六国

の子孫を滅ぼし，錐を立てるほどのわずかの領地さえなくさせました。陛下には本当にもう一度六国の後裔を立て，全員，漢より印を受けさせることができましたなら，その君臣人民は必ずみな陛下の徳をおし戴き，教化になびき恩義を慕い，臣妾となることを願わない者はないでしょう。徳義すでに行きわたりましたならば，陛下は南面して天下に覇をとなえられませ。楚は必ず襟を正して来朝いたすでしょう。

漢王「なるほど。即刻，印を彫らせよう。先生，それを佩びて出かけて下さい。」

この記事は，同じ漢の3年，楚の項羽と苦戦している漢王＝劉邦の策として，前述の酈生伝に見える酈生の提案や，高祖紀の中の袁生の意見とは，あまりにも相違している。しかも酈食其＝酈生という同一人物がまったく別の意見を述べるとは，どういうことか。

秦に滅ぼされた六国の子孫を立てることは，いま問題にしている時期では論外である。すでに陳勝呉広の乱で，六国の後を立てれば，自分の味方をつくり秦の敵をふやすことになると，張耳・陳余が主張したが，陳勝は聞きいれず，自ら王の位についた（張耳・陳余伝）。陳勝を王に推戴したのは，三老・豪傑である（陳渉世家）。戦国七雄の権威はない。

六国の子孫と項羽・劉邦との力関係については，すでに多少言及したように，このふたりの実力者や，第三の勢力たる韓信とは，とうてい比べられない。

まず楚では，秦に滅ぼされた時の懐王の孫＝心を，項梁（羽のおじ）が民間から探し出して，懐王の地位につけた。のち項羽は懐王の称号を格上げして義帝とした。しかし漢の元年，項羽は義帝を殺した。殺害は九江王＝黥布に命ぜられ，布は将をして撃たしめた（黥布伝。実行者は両紀と相違）。この事件は“大逆無道”と天下に報道され，項羽に対する世論を悪くする結果となった（項羽紀・高祖紀）。

魏の場合は，その国の公子＝豹に対し，酈生が説得に行ったが失敗し，韓信が武力で捕虜とし，漢王に従属させた。豹は仲間割れから，殺された（魏豹伝）。

趙・燕・齊の3国は，韓信軍のブルドーザーのような進撃の前に屈服した（張耳・陳余伝，淮陰侯伝，田儋伝，酈生伝）。

韓は，留侯＝張良の先祖が相を勤めた。項梁が楚の懐王を立てた時，張良は韓王族の成を立てて韓王としたが，成は項羽に殺された。もうひとり韓王＝信は，張良のあっせんで漢王に使えることになり，漢の3年，漢王が滎陽から脱出した時，韓王信は周苛らとともにそこを守っていた。のち軍事の才あることを認められ，匈奴族に対する防備の任につけられたが，高祖＝劉邦に疑惑を持たれ，匈奴に降伏した（韓王信伝）。

Ⅱの略年表第1項目にあるように，劉邦は「五諸侯兵，凡五十六万」を率いて楚を攻めた。この数からは，天下の大多数が彼を支持して，絶対有利なはずなのに，そのうちから「十余万人」，また「十余万人」が次々に楚に倒され，運よく大風が起こって昼なお暗くなり，漢王はそれに乗じてわずか「数十騎」と一緒に逃げるほどに没落した。

酈生が齊王に向かって，漢王が項王より優勢であると説得した弁論の中で，漢王が“天下の兵を収め，諸侯の後を立つ”と評した。これは味方が多いことを表現するお決まり文句であって，実態を示すものではない。

もう一点，或る勢力を味方につけるのに，印鑑を作るだけでは済まないことぐらい，ほんものの劉邦は十分に承知していた。彼は魏豹に対する酈生の説得が失敗した経験をもつ（魏豹伝，高祖紀）。また当時楚に属していた黥布をして楚に背かせるために，謁者＝随何を派遣したこともあるし（黥布伝），また酈生の申し出により，彼を齊への工作に送った（本伝）ことがある。

劉邦が六国の子孫を立てようとし，任命のための印を刻しようとしたところへ，張良がやって来る。漢王はちょうど食事中である。人が食事中なら，話しかけるのを遠慮するのが当時の中国でも礼儀ではなかったか。ともかく張良は漢王に，何事かと尋ねる。漢王は酈生から聞いたばかりの話を伝えて，「何如（どうかね）」と問う。少し得意の気持ちが含まれていよう。張良は「陛下の事去らん（あなたのやることはだめです）」と，結論を先に言う。漢王はその意味がわからないから，「どうして？」と問う。

張良は「ちょっとあなたのお箸を貸しなさい」と，漢王が飯を食うのに使っていた箸を取り上げる。ずいぶん失礼な行為である。漢王は驚いたが，信頼する張良が何か言おうとするのであるから，黙っているほかない。ここらはまさに舞台の上の芝居である。

Ⅳ

以下に，酈食其の案を批判する張良の問いと，それに対する漢王の答えを紹介する。

「殷の湯王が夏の桀王を伐ち，その子孫を杞に封じたのは，桀王の死命を制することを度（はか）ってのことです。今，陛下は項羽の死命を制することができますか。」

「たぶんできない。」「それは，あの案がだめなことの第１の理由です。」

「周の武王が殷の紂王を伐ち，その子孫を宋に封じたのは，紂王の首を得ることを度ってのことです。今，陛下は項羽の首を得ることができますか。」

「たぶんできない。」「第２の理由です。」

「武王は殷の都に入ると，商容が住む里門に顕彰の意を記し，箕子のいましめを釈き，比干の墓を土盛りしました。今，陛下は，聖人の墓に土盛りし，賢者の住む里門を顕彰し，智者の門に挨拶することができますか。」

「たぶんできない。」「第３の理由です。」

「武王は鉅橋の穀物を放出し，鹿台の銭をばらまいて，貧窮の人々に賜りました。今，陛下は倉庫の物を放出して貧窮の者にたまわることができますか。」

「たぶんできない。」「第４の理由です。」

「殷との戦争が終わると，武王は戦車を廃して普通の車に作り直し，干や戈を逆さにして，それ

に虎の皮の覆いをかけ，二度と武器を使用しないことを天下に示しました。今，陛下は武を廃し文を行い，二度と武器を使用しないことができますか。」

「たぶんできない。」「第5の理由です。」

「武王は馬を華山の南に休ませて，戦争しないことを示しました。今，陛下は馬を休ませて使わないことができますか。」

「たぶんできない。」「第6の理由です。」

「武王は桃林の北に牛を放し，二度と物資を輸送しないことを示しました。今，陛下は牛を放し，物資輸送をやめることができますか。」

「たぶんできない。」「第7の理由です。」

「天下の浪士が，墳墓を棄て，親戚を離れ，旧友を去り，陛下に従って働いているのは，領地をもらえると期待するからです。今，六国の子孫を立てれば，天下の浪士たちは帰国してもとの主人に仕え，親戚，旧友，墳墓の場所に戻るでしょう。そうなれば陛下は誰に頼って天下を取るのですか。いけない第8の理由です。それにまた，そもそも楚ほど強い国はないのですから，六国の主となった者は，再び楚に屈服するでしょう。そうなれば，陛下はどうして彼らを臣とすることができますか。酈食其の謀を用いましたら，陛下のやることはだめになります。」

漢王は食事をやめ，口の中の物を吐き出して罵った「豎儒（前出，ばか儒者。食其のこと）わしの仕事をぶちこわすつもりか。」すぐさま印をつぶさせた。

この張良の見解に疑問を投げかけたのは，宋の王若虚である。その文は瀧川龜太郎『史記会注考証』に載っている。彼の主張はこうである：

張良の八難は，古今これを美談と言っているが，私の考えでは，彼の論は甚だ疎である。桀・紂が滅びた後で，湯・武はその子孫を封じた。張良は「能く桀の死命を制し，紂の頭を得ることを度（はか）ればなり」という。滅びる前に封ずることはできないはずだ。また湯・武が封じたのは，世論をおもんばかってにすぎず［重絶人之世耳］，利害を計ってではない。項羽の命と比べられるか？酈生が漢王に説くのは，世間の人の心が楚に背き漢に味方することを期待してのことであり，項羽の子孫を封ずるつもりなどない。湯武の事勢と比較できない。また湯と武は時が違うだけで，事理は同じである。「死命を制する」といい，また「頭を得る」というも，同じことで，ふたつに分ける必要はない。「商容の閭を表す」「箕子の拘を釈く」「比干の墓を封ず」を並べてあるのは，同一だからである。「干戈を倒置す」「馬を帰す」「牛を放す」は同じことなのに別々にしたのはなぜか。漢書ではこの欠点を直すべく，湯王と武王をひとまとめにする。また「死命を制する」対象を桀紂そのものでなく，その子孫とする。こうしてもやはりその比喩は項羽の件と類しない。湯王・武王を1項目にまとめたから，最後の「楚より唯だ彊（つよ）きは無し」を第8項目に入れた。

史記留侯世家　「昔者湯伐桀，而封其後於杞者，度能制桀之死命也。」

「武王伐紂，封其後於宋者，度能得紂之頭也。」

漢書張良伝　「昔，湯武伐桀紂，封其後者，度能制其死命也。」

（「封其後」の其は桀紂を，「制其死命」の其は彼らの子孫をさす）

資治通鑑巻10　「昔湯武封桀紂之後者，度能制其死命也」（後＝其，漢書に従う）

もうひとつ，清の梁玉繩が提出した疑問は，劉邦はまだ天子でないのに，食其・張良が15回も「陛下」と呼びかけていること（几帳面に勘定した！）で，これも『史記会注考証』にある。

V

王若虚と梁玉繩が提出した疑問は，すこぶる重要である。筆者はそれに答えよう。結論として，この留侯世家の漢の３年の条は，司馬遷の創作であり，その意図は劉邦を徹底的に叩きのめすことにある。その理由を述べる。

(1)　状況の説明が，項羽が漢王を滎陽に包囲したというだけで，簡単すぎる。虚構を書くには，さすが司馬遷の筆もためらう。

(2)　戦国の六国の子孫を尊重する条件がないこと，Ⅲに述べたとおり。

(3)　酈食其が「六国の後世を立てて印を受けしめる」と言ったのは，それ相当な待遇を与えるという抽象的な意味なのに，漢王は「印を刻する」と誤解した，いや司馬遷が誤解させて笑いものにした。最後に印をつぶす漢王のしぐさも喜劇的である。司馬遷の筆は恐ろしいまでに鋭い。

(4)　劉邦をして「未能也（たぶんできない）」を８回も言わせたことは，彼を侮辱する以外の何物でもない。王若虚の言う「八難（８項目の非難）」の８は何か。人を論難するのに８度くりかえすのが適当である。それ以下では弱いし，それ以上では攻める方がだれる。

(5)　張良が劉邦を批判する基準として湯王・武王をもってきたのは，意地悪である。こんな伝説的名君と比較されたら，誰だって見劣りがする。

(6)　張良の言葉「湯武が桀紂を伐ち，その子孫を封じたのは，彼らの死命を制することを度ったからである」を，王若虚が疑問とするのは当然である。彼らを伐ってしまったからには，彼らの死命を制してしまっている。それを度る必要はない。しかしどうせ作り話である。わかりにくい方が，漢王を困らせ，読者を悩ませて，司馬遷にとっては楽しかろう。

(7)　理由の３と４は，首尾よく天下を取れた者だけがなしうる善政である。戦争で不利な漢王には夢物語でしかない。また「武器を片付けた」「馬を休ませた」「牛を放した」ことにそれぞれ１項目を充て，ていねいに叙述したことは，悪戦苦闘中の漢王を痛めつけるのに，効果的である。

(8)　そもそもこの問題が発生したのは，漢が楚に対して不利であり，漢王＝劉邦が楚の力を

弱めるにはどうするかを，酈食其に謀ったことにある。これについて張良が劉邦に与えた意見は，食其の策に反対するだけで，「楚より強いものはない」というのが結論である。張良は正常な人間であろうか。

もうひとつの疑問，まだ皇帝でない劉邦に向かって「陛下」と呼んだのは，必要以上の敬語を使うことにより，礼儀正しく相手を侮辱するためである。

漢書高帝紀（史記高祖紀に当たる）では，史記留侯世家の漢三年の条を採り，上記Ⅱの主要事件の番号10と11の間に挿入している。袁生の提案，および酈生伝の進言は，いずれもそのまま載せている。漢書の編者は，問題の箇所をフィクションとは考えていなかったらしい。

史記のあと，漢書までに，張良に対する信仰ができ，中国でも日本でも定着した。損をしたのは酈食其である。彼はまともな人間であるのに，張良を引き立てる愚者にされてしまった。ただ中国では上記のように，張良に関する記事に疑いを抱く人がいたことを指摘しておきたい[7]。

註

1）貝塚茂樹「儒教的精神の勝利」（『古代の精神』，『貝塚茂樹著作集』６）では，劉邦に対する酈食其の貢献を指摘して，次のようにいう。「高祖は極端な実用主義者であったから，実用の伴わない学問・知識を蔑視していた。それが酈生によって学問・知識が戦争にも役立つことを知らされた。……家は赤貧で，郷里の門番に落魄して狂生と呼ばれながら，読書を事として変わらなかった酈生の前半生は，一部の読書人がこの戦乱の世において遭遇した悲惨な境遇をありありと示している。討秦の旗をかかげて郷里を過ぎる幾多の将軍を白眼で看過した酈生が，用うべしとした高祖に謁して，毅然としてその無礼を咎めたのは，その平生から見て怪しむにたらないのであるが，この一挙がよく高祖に滅秦の大業を成就さす重大な転期を与えた。」

2）項羽の東方進撃は下のように２度ほどあるようで，そのどれかはわからぬ。

項羽紀：［漢之四年］項王乃自東擊彭越。……彭越復反，……項王……乃東行擊陳留・外黄。

高祖紀：［三年］彭越大破楚軍。項羽乃引兵，東擊彭越。……彭越将兵居梁地，往来苦楚兵，絶其糧食。……四年，項羽……乃行，擊陳留・外黄・睢陽，下之。

彭越伝：漢四年冬，項王与漢王，相距滎陽。彭越攻下睢陽・外黄，十七城。項王聞之，乃使曹咎守成皐，自東収彭越所下城邑，皆復為楚。

3）「収取滎陽，拠敖倉之粟」滎陽の北，黄河の岸に敖倉がある。これは始皇帝が敖山に作った食糧倉庫で，滎陽との間に甬道（両側に防壁をもつ道路）が通じていた。

時代をさかのぼって，戦国の縦横家＝蘇秦は，韓の王に対する弁論の中で，韓の要害の地として鞏と成皐を挙げ，また張儀は楚王に向かって「成皐を取れば，韓は臣となって入朝するでしょう」と説いている（それぞれの伝）。

范雎は秦の昭王に，韓は秦にとって心腹の病のようなものであるから，それを除く策を与えて言う，韓の滎陽を攻めれば，鞏と成皐の道路は不通となり，北，太行の通路を切断すれば，上党の軍隊は南下できない。一たび出兵して滎陽を攻めるだけで，韓の領土は三つに分かれてしまう，と（范雎伝）。

また秦は荘襄王の時，蒙驁（蒙恬の祖父）が将として韓を攻め，成皐と滎陽を奪い，三川郡を置いた（蒙恬伝）。三川とは伊水・洛水・黄河をいう。丞相＝李斯の長男＝李由がこの郡の守となった。陳勝呉広の乱で，呉広が滎陽を包囲したが，秦将＝章邯が来援し，包囲軍は内紛のため呉広が死んだ（李斯伝）。李由はのちに項羽に斬られた（項羽紀）。

滎陽一帯は，関中と黄河下流平野とをつなぐ交通の要衝に当たっていた。「塞成皐之険，杜大行之道，距

蜚狐之ロ，守白馬之津」とある険，道，ロ，津という語がそのことを示す。

この地で劉邦が項羽と何年にもわたって争奪戦を演じた理由は，内藤湖南によれば「楚漢の戦いは多く滎陽から成皐の間で行われている。これは黄河が大行山脈を横断して流れる地方で，今日では河南の中心であるが，山西と河南と直隷との境目に在る処で，それが天下の大勢を決める所であった。」(『支那上古史』，『内藤湖南全集』10)

4) 趙は韓信が攻め，“背水の陣”をしいてこれを破った。その後，使者を燕をやると，燕は風に従うように，靡いた（高祖紀，淮陰侯伝，田儋伝)。

5)「楚漢久相持不決」の句が，項羽紀・高祖紀ともに，漢4年の条に見える。また，楚軍が漢軍を滎陽に包囲し，3年間対峙した時，蕭何は関中の地を鎮撫し，戸口を計算して軍兵を送り出し，糧食を補給して絶やさず，人民に漢を愛させ，楚に組みする気を失わせた（蕭相国世家，太史公自序)。

蒯通が韓信に説く言に，楚漢ともに苦しむことを述べ，項羽は彭城に旗あげしてから，転戦して逃げる漢軍を追撃し，滎陽まで到達した。勝ち運に乗って次々と攻略し，その威勢は天下に轟いた。ところがその軍は京と索の間で痛めつけられ，西の山に阻まれて前進できず，3年たった，と（淮陰侯伝)。

6) 念のために問題の3箇所の原文を示す。

○酈生伝

漢三年秋，項羽撃漢，抜滎陽。漢兵遁保鞏・洛。楚人聞淮陰侯破趙，彭越数反梁地，則分兵救之。淮陰方東撃齊。漢王数因滎陽・成皐，計欲捐成皐以東，屯鞏・洛，以拒楚。酈生因曰「臣聞，知天之天者，王事可成。不知天之天者，王事不可成。王者以民人為天，而民人以食為天。夫敖倉，天下転輸久矣。臣聞，其下迺有蔵粟甚多。楚人抜滎陽，不堅守敖倉，迺引而東，令適卒，分守成皐。此乃天所以資漢也。方今楚易取，而漢反卻，自奪其便。臣竊以為過矣。且両雄不俱立，楚漢久相持不決。百姓騒動，海内揺蕩，農夫釈耒，工女下機。天下之心，未有所定也。願足下急復進兵，収取滎陽，拠敖倉之粟，塞成皐之険，杜大行之道，距蜚狐之ロ，守白馬之津，以示諸侯效実形制之勢，則天下知所帰矣。方今燕・趙已定，唯齊未下。……」

○高祖紀

［三年］漢王之出滎陽，入関収兵，欲復東。袁生説漢王曰「漢与楚相距滎陽，数歳。漢常困。願君王出武関，項羽必引兵南走。王深壁，令滎陽・成皐間，且得休，使韓信等，輯河北・趙地，連燕・齊，君王乃復走滎陽，未晩也。如此，則楚所備者多，力分。漢得休，復与之戦，破楚必矣。」漢王従其計。……

○留侯世家

漢三年，項羽急囲漢王滎陽。漢王恐憂，与酈食其，謀撓楚権。食其曰「昔湯伐桀，封其後於杞。武王伐紂，封其後於宋。今秦失徳棄義，侵伐諸侯社稷，滅六国之後，使無立錐之地。陛下誠能復立六国後世，畢已受印，此其君臣百姓，必皆戴陛下之徳，莫不郷風慕義，願為臣妾。徳義已行，陛下南郷称覇，楚必斂衽而朝。」漢王曰「善。趣刻印。先生因行佩之矣。」

史記の読みについては次のものを参照した：

田中謙二・一海知義『史記』(朝日文庫，中国古典選)

小川環樹・今鷹真・福島吉彦『史記世家』(岩波文庫)

同『史記列伝』(同)

7) 貝塚「儒教的精神の勝利」では，上の註1)のやや後で，留侯世家の漢三年の条に言及し，張良の八難について次のように述べている。「高祖と張良の討論は長文にわたるが，その要旨は，殷湯王と周武王は，夏王朝と殷王朝を滅ぼした後，改めてその後裔を小国に封じたのである。しかもこれは聖賢の箕子・比干を顕彰することを始め，府庫を開いて貧民を救済し，兵を帰休させ，武器を蔵して再び用いないという文化的・社会的・平和的施策の一環として，意味をもつのである。漢王は果たして項羽の死命を制しているか，また文化政策・社会政策・平和政策を実行する意志をもつものであるかと，問うのである。」